



分科会 10 長期実務実習元年 —実りある実習を求めて—

W-10-07 薬局での実務実習を体験して

たかはし りな
高橋 利奈

慶応義塾大学薬学部 5年生

初めての長期実務実習を受けるということで、不安と期待と共に小諸へ帰省しました。実習開始前に協力薬局を含めた「顔合わせ会」が行われ、少し緊張の解けた状態で薬局へ向かうことができました。石塚薬局の職員皆にあたたかく受け入れていただき、2.5ヵ月が始まりました。

実習が始まると、長野県の「わくわく実習」のなかの「患者アンケート」により、実習初期の前半5週間で、100人以上の患者さんと直接話すことができました。そのなかの、「薬剤師に期待すること」という質問では、本当に多岐にわたる意見をいただいたこと、医療機関で悲しい思いをしたことをずっと誰にも話せずにいてようやく話せたと、涙を浮かべていた方がいらしたことが印象に残っています。

後半は、アンケートより多い延べ150人の患者さんに服薬指導をさせていただきました。アンケートで一度お話をさせていただいた方も多く、親しみをもっていただき、投薬時に話がしやすいと感じることも多数でした。一方、アンケート時では1聞くと10話してくれていた方も、服薬指導となるとなかなか聞き取りができないこともありました。話をしていると、病院内での出来事や生活のことといった、薬ではない相談も受けます。薬剤師は薬だけでなく医療全般について知っていることで、患者さんのニーズに答えられ、信頼を得られると感じました。患者さんが自身の状態・症状の何に苦しんでいるのか聞き取り、改善するために薬剤師ができることは何であるのか、今の私に全ては解決できませんが、大学に戻り幅広い知識を身につけ、見つけていきたいと思っています。患者さんと関わる機会にはないため、貴重な経験でした。

また、在宅はのべ8回同行しました。薬局内での関わりに比べ、より深く患者さんの生活に介入しているという印象を受けました。意外に思ったことは、他の医療従事者や介護従事者と連携の程度は1件1件異なったことです。さらに、患者さんの薬剤師に対するとらえ方も、身近な話し相手であったり、お客さんであったりとひとりひとり違っていました。そのため、患者さんとの距離の保ち方やチーム医療の関わり方について、薬局内とはまったく違うところがあると感じました。

実習中には、8つの協力薬局と6つの外部施設へ伺いました。中医学を取り入れている薬局、ドライブスルーがある薬局など、特色の異なる複数の協力薬局を体験させていただいたことにより、薬局の違いを知りそれぞれの良いところを8倍体験できました。外部実習では、近隣地区の実習生と励まし合い実習することができました。施設実習での、知的障害や認知症、身体機能低下により言葉が話せない方とのコミュニケーションは、薬局での患者さんとのコミュニケーションに比べ、難しいと感じました。しかし、明るく笑顔で接することで相手の笑顔を見ることができ、嬉しかったです。普段内部まで見ることのできない施設を見学させていただき、薬剤師が地域に貢献できることや職能を活かす分野がたくさんあるということを知りました。

他に、2.5ヵ月の間に地域の勉強会やメーカーによる勉強会に18回参加させていただき、新しい知識を得る方法を学びました。メーカーの勉強会ではMRの仕事も見ることができたため、担っている役割や重要性を知ることができました。1ヵ月間の内用薬服薬体験、1週間の吸入薬体験、小児用散・液剤の味見、散剤・OD錠について先発品とジェネリック医薬品との味の比較、湿布の使用感体験等もさせていただきました。効果効能以外の薬剤の特徴も薬の専門家として知っている必要性を感じました。ジェネリック医薬品へ変更する際にも、使用感や味の違いを説明できると患者さんに伝わりやすいのではないかと思います。

2.5ヵ月の長期実習を終え、現場の薬剤師の業務・実情が見えてきました。大学での座学も、基礎としてなくてはならない知識であることが改めてわかりました。さらに、大学へ持ち帰る課題、Ⅱ期の病院実習でより詳しく学びたいことが見えてきました。貴重な経験を十分に活かしていきたいと思っています。

実習を支えてくださった小諸北佐久薬剤師会のみなさん、近隣地区の実習生とその指導薬剤師の先生、特にお世話になった石塚薬局、小林潤先生、本当にありがとうございました。